The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	村上春樹の短編小説集『神の子どもたちはみな踊る』：デタッチメントからコミットメントへ
Author(s)	津田, 保夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57357
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

村上春樹の短編小説集『神の子どもたちはみな踊る』
―― デタッチメントからコミットメントへ ――

津 田 保 夫

１．はじめに

1995 年に起こった阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件という二つの大きな出来事は、作家村上春樹にとっても大きな転機をもたらすものであった。彼は 1991 年にプリンストン大学に招聘されてから、主としてアメリカで生活しながら執筆活動を続けていたが、1 月 17 日に阪神地区で大震災が起こったことを知ると、アメリカから日本に電話をかけて、実家は半壊したが両親は無事であることを確認する。そして同年 3 月に一時帰国すると、今度は神奈川県大磯の自宅で、マスコミ関係者からオウム真理教信者による地下鉄サリン事件が起こったという知らせを受ける。彼はそれからいったんまたアメリカに戻って米国大陸横断旅行を行い、ハワイのカウアイ島に 1 ヵ月半ほど滞在するが、そのあと日本に正式に帰国することになる。

この帰国を決心したのは「やはりあの二つの事件があったから」で、このとき「戦後五十年の節目で、日本は確実に転換しつつある」ことを実感し、「自分の目でその変化をしっかり見届けたいという気持ちが強くありました」と村上は述べている。[1] その後、彼はこの二つの事件に関連した様々な活動を積極的に行うようになる。95 年 9 月には故郷でもあり震災の被害を受けた神戸市と芦屋市で自作朗読会を開催する。翌 96 年には地下鉄サリン事件の被害者たちにインタビューを行い、のちに『アンダーグラウンド』という長編ノンフィクションにまとめ上げる。さらに 97 年 5 月には震災後の西宮から神戸までを歩き、98 年にはかつてのオウム信者たちへのインタビューを行って、『約束された場所で ― underground 2』というノンフィクションを出版する。そして 99 年には文芸雑誌『新潮』8 月号から 12 月号まで 5 回にわたって、「地震のあとで」という副題の付いた連作短篇小説を掲載し、翌 2000 年に書き下ろし小説『蜂蜜パイ』を加えた 6 作品からなる短編集『神の子どもたちはみな踊る』を刊行する。[2]

このような村上春樹の作家としての変化は、95 年秋の帰国直後に行った河合隼雄との対談集『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』では、「デタッチメント」と「コミットメント」という言葉で表現されている。その中で彼は「以前はデタッチメント（関わりのなさ）というのがぼくにとっては大事なことだった」が、「コミットメント（関わり）ということについて最近よく考える」ようになり、「小説を書くときでも、コミットメントということが

---

[1] 「村上春樹ロングインタビュー」（『考える人』No.33, 2010 年夏号 新潮社）28－29 ページ。

[2] 以上の事実関係についてはとくに、平野芳信『村上春樹 ― 人と文学』（勉誠出版 2011 年）の「評伝 村上春樹」と巻末の「村上春樹関連年譜」を参照。

ぼくにとってはものすごく大事になってきた」と述べている。[3] つまり、作家としての姿勢が「デタッチメント（関わりのなさ）」から「コミットメント（関わり）」へと移行していったのである。

このような変化の背景として、村上は対談の冒頭部分のフットノートの中で、「かなり長い期間にわたって外国に出て暮らしたということも大きいだろうと思います」[4] と書いている。つまり、彼は「日本にいるあいだは、ものすごく個人になりたい、要するに、いろいろな社会とかグループとか団体とか規制とか、そういうものからほんとに逃げて逃げて逃げまくりたいと考えて」いたが、アメリカで暮らすようになると「その最後のころから逆に、自分の社会的責任感みたいなものをもっと考えたいと思うようになってきた」という。[5] なぜなら、とくにアメリカは「もともと個人として生きていかなくちゃいけないところ」なので、「そこにいると、もう個人として逃げ出す必要はない」のであり、「ぼくの求めたものはそこでは意味を持たないことになる」からである。[6]

ここで村上が「ぼくの求めたもの」というのは、簡単にいえば個人の自由ということになるだろう。逆に、彼が日本にいたときに逃げたいと感じていた「いろいろな社会とかグループとか団体とか規制とか、そういうもの」は、のちに彼自身がよく使うようになる言葉で言い換えれば「システム」[7] ということになるだろう。彼はそのようなシステムから逃れるために、会社に就職せずにジャズバーを始め、作家になっても文壇からは距離を置いていたが、それでも日本にいるとマスコミや出版社などから様々な注文が舞い込み、「彼らは僕にいろんなことを要求する」[8] ようになったので、海外へ脱出したのだった。したがって、彼のデタッチメントの姿勢は個人に対するそのようなシステムの圧力あるいは暴力からの逃避という性格を持っていたといえるだろう。

村上は河合隼雄との対談で、日本脱出とアメリカ生活の話題に引き続いて、68～69 年の学生紛争のコミットメントについて語っている。そのころは「ぼくらの世代にとってはコミットメントの時代だった」が、「それがたたきつぶされるべくしてたたきつぶされて、それから一瞬のうちにデタッチメントに行ってしまう」。[9] このような学生紛争へのコミットメントの失敗や幻滅から生じたデタッチメントの感覚は、『風の歌を聴け』から『ノルウェイの森』に至る村上春樹のいくつかの作品にはっきりと感じ取ることができる。[10] このような感覚が「ぼくだけではなくて、ぼくの世代に通ずることなのではないかという気はす

---

[3] 村上春樹・河合隼雄『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』（新潮社 1999 年）18 ページ。
[4] 同上 16 ページ。
[5] 同上 14－15 ページ。
[6] 同上 15 ページ。
[7] 村上はのちに「個人」と対立する概念として「システム」という言葉をよく用いるようになるが、そのもっとも有名な例はもちろん 2009 年のエルサレム賞受賞講演であろう。周知の通り、その中で彼はシステムと個人をそれぞれ壁と卵に喩え、彼自身は常に卵の側に立つことを宣言している。村上春樹『村上春樹 雑文集』（新潮社 2015 年）97－99 ページ参照。
[8] 村上春樹『遠い太鼓』（講談社 1993 年）39 ページ。
[9] 『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』（前掲書）20 ページ。
[10] このようなデタッチメントの感覚は、村上の初期の作品を高く評価していた川本三郎の言葉を借りれば「都市の感受性」ということになるだろう。川本三郎『都市の感受性』（筑摩書房 1988 年）参照。

る」という村上に対して、河合は「いまの若者たちもやっぱりデタッチメントの気分は非常に強い」と答えるが、ここで村上は阪神淡路大震災とオウム事件に言及し、「あれはまさにコミットメントの問題ですよね」と言う。[11] これら二つの事件は「どちらも日常的な想像力を超えた出来事」であり、それによって「通常でない状況が出現」して、日本人が潜在的に持っていた「できるかぎりは何かにコミットしたい」という意欲が現れてきたと考えるのである。[12]

これは状況としては学生運動のときと類似しているが、河合は学生運動時のコミットメントについて、「全体にベタベタにコミットしているやつが立派なやつ」で「個人の自由を許さなくなる」のに対し、「欧米のコミットする人は、個人としてコミットします」と述べている。[13] 村上春樹がコミットメントに幻滅した学生運動も、個人を抑圧するシステムと化してしまっていたのであり、そのような観点はたとえば『ノルウェイの森』における「僕」や緑による学生運動家たちへの批判にも表れているが、彼は学生紛争時に「どうコミットするかという方法論になると、選択肢はものすごく少なかった」と指摘し、「あれは悲劇だという気がする」と述べている。[14]

するとここで問題となるのは、阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件という二つの「日常的な想像力を超えた出来事」によって惹起された日本人たちのコミットメントは、システムの暴力からの個人の自由を確保しながら、どのようにして行われうるのかという方法論と可能性のあり方である。そして、この問題の解決の試みとデタッチメントからコミットメントへの有効な移行の過程を、阪神淡路大震災をテーマとする連作短編小説集『神の子どもたちはみな踊る』から読み取ることができる。本稿ではその過程を三つの段階に分けて、掲載順にそれぞれ該当する作品を二つずつ取り上げて論じることにする。

２．デタッチメントと空虚感

短編小説集『神の子どもたちはみな踊る』[15] に収録された 6 編の作品は、いずれも阪神淡路大震災が大きなテーマとはなっているが、地震自体が描かれるのではなく、地震をきっかけとして登場人物の生活や環境や心理に生じた何らかの大きな変化が物語の中心となっており、その変化はそれぞれの作品において、デタッチメントからコミットメントへの移行の段階を示すものとして解釈することが可能である。その観点から最初の 2 作『UFO が釧路に降りる』と『アイロンのある風景』を読むと、それらは主人公たちが地震をきっかけとしてデタッチメントによる自己の空虚感を自覚する物語ということになる。

---

[11] 同上 20－21 ページ。
[12] 同上 21－22 ページ。村上は対談の別の箇所でも、「今の日本の社会というのは、さっきもオウムと地震の問題が出てきましたが、精神的なコミットメントの問題で、大きな変革の地点にいるんじゃないかなと感じるのです」と述べている。同上 68 ページ。
[13] 同上 23 ページ。
[14] 同上 20 ページ。
[15] この短編小説集からの引用は新潮文庫版、村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』（新潮社 2002 年）から行い、引用箇所の末尾にページ数を示す。

『UFO が釧路に降りる』の主人公は小村という老舗オーディオ機器専門店でセールスの仕事をしている男だが、仕事も順調で妻との仲もうまくいっている。ところが地震が起きてから五日間の間、妻はテレビで地震のニュースをずっと見続けたあと、もう戻ってくるつもりはないという置き手紙を残して山形の実家に帰ってしまう。手紙にはその理由として、「あなたが私に何も与えてくれないこと」(p.15)、「もっとはっきり言えば、あなたの中に私に与えるべきものが何ひとつないこと」(p.16) が問題で、「あなたとの生活は、空気のかたまりと一緒に暮らしているみたいでした」(p.16) と書かれていた。離婚を承諾した小村は一週間の有給休暇を取って北海道へ旅行することになるが、同僚の佐々木から小さな骨箱のようなものを釧路の妹に届けてほしいと依頼される。釧路空港に到着すると、佐々木の妹の他にシマオさんという女性が迎えに来ていた。小村は依頼された包みを渡すと、三人で食事に行ったあと、シマオさんとラブホテルに泊まることになる。そこでシマオさんは小村が運んできた箱について、「小村さんの中身が、あの箱の中に入っていた」(p.43) のであり、それを渡してしまったので「もう小村さんの中身は戻ってこない」(pp.43-44) と言う。シマオさんはすぐにそれを冗談として打ち消すが、小村は一瞬だが「自分が圧倒的な暴力の瀬戸際に立っていることに思い当たった」(p.44)。

小村は妻から「与えるべきもの」を何ひとつもたない「空気のかたまり」のような人間だと指摘され、シマオさんからは冗談ながら「中身」を喪失してしまったことを言われて、自己の空虚感を自覚する。そして妻が小村に欠けているとする「与えるべきもの」こそ、他者に対する関わり、すなわちコミットメントであろう。小村は独身のときはたくさんの女とつきあったが、結婚してからは妻以外の女と寝たことはなく、妻はとくに魅力的ではなかったにもかかわらず、「ひとつ屋根の下に妻と二人でいると、肩の力が抜けてのびやかな気持ちになることができた」(p.15)。したがって、妻とは自然と相性がよかったため、積極的に妻に対してコミットメントを行う必要がなかったのである。また彼は地震という「日常的な想像力を超えた出来事」に対しても特別な関心を示さず、地震のニュースをずっと見続ける妻にも深く関わろうとせず、一人で淡々と食事をして、普段と同じように仕事に出かけている。また妻が実家に帰ったあとも、たとえば『ねじまき鳥クロニクル』[16] では主人公の岡田は失踪した妻を探しに行くのに対して、小村は妻の実家に電話をするだけで離婚を承諾し、それ以上の行動は起こさない。このように、小村の態度はまさにデタッチメントを基盤としているのであり、妻はそこに小村の空虚感を感じ取ったのであろう。

この物語で地震は、最後に小村が一瞬感じるような「圧倒的な暴力」であり、それは表題の釧路に降りる UFO や、突然人を襲う熊と同列に置かれている。佐々木の妹ケイコは、知り合いのサエキさんの奥さんが UFO を見て、夫と子供を置いて家出したという話をする。またシマオさんは、短大生のときに一つ年上の大学生と熊が出る山へハイキングに行き、茂みの中に入って熊よけの鈴を振り続けながらセックスをしたエピソードを語る。そ

[16] 河合隼雄との対談で村上春樹は『ねじまき鳥クロニクル』について、「主人公はいろいろな登場人物にコミットメントを迫られる」と述べている。『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』(前掲書) 100 ページ。

して、シマオさんは小村に「もっと素直に人生を楽しむこと」(p.39) を勧め、その理由として「明日地震が起きるかもしれない、宇宙人に連れていかれるかもしれない、熊に食べられるかもしれない。何が起こるか、そんなの誰にもわからないのよ」(pp.39-40) と言う。人間はつねに、いつ襲いかかってくるかわからない地震や UFO の宇宙人や熊のような「圧倒的な暴力の瀬戸際」に立たされているが、そのような危険性に対してもデタッチメントの姿勢をとってきた小村は、[17] 箱とともに自分の中身まで放棄してしまったというシマオさんの言葉によって、自己の空虚感を自覚した。そして同時に、自分が「圧倒的な暴力の瀬戸際」に立っていることに気づき、いやおうなくコミットメントへと向かわざるを得なくなる。最後に「ずいぶん遠くに来たような気がする」(p.44) という小村に対して、シマオさんは「でも、まだ始まったばかりなのよ」(p.44) と答えるが、まさに小村のデタッチメントからコミットメントへと向かう道程は、「まだ始まったばかり」なのである。

第 2 作目の『アイロンのある風景』では、主人公の順子は高校三年生の五月に家出をして、所沢から茨城県の海岸の小さな町へやってきてコンビニの店員になり、そこで知り合った二つ年上のサーファー啓介となんとなく同棲を始める。啓介は「世界なんていつ終わるかわからん」ので、「大事なのは、今の今しっかりメシが食えて、しっかりちんぽが立つことだ」(p.49) と考えるような男で、今現在の自分と直接関係のない事柄に対してはデタッチメントの姿勢をとっている。これに対して順子の方は、高校一年生の夏休みにジャック・ロンドンの『たき火』を読んで、主人公が死を求めていながらも「生き残ることを目的として、圧倒的なるものを相手に闘わなくてはならない」という「根元的ともいえる矛盾性」(p.53) に心を揺さぶられる。しかし、彼女はそのような「圧倒的なるもの」との闘いというコミットメントの重要性を感じながらも、無目的になんとなく生きている。

そんなときに、彼女は三宅さんという四十代半ばぐらいの男と知り合う。三宅さんは近くの家を借りて一人暮らしをして絵を描いている人物で、よく浜で一人で焚き火をしていた。順子もその焚き火に加わるようになり、焚き火の炎に「何か深いもの」(p.63) を感じる。それは「気持ちのかたまり」のようなものだが、「観念とよぶにはあまりに生々しく、現実的な重みをもったもの」(p.63) だった。一方、三宅さんはちょうど地震の起こった神戸に妻子を残してきており、ずっと自分が冷蔵庫の中に閉じ込められて死ぬ夢を見ていた。彼は最近、『アイロンのある風景』という、部屋の中にアイロンがあるだけの絵を描いたが、そのアイロンは「何かの身代わり」(p.74) として描かれたものだった。この絵の話を聞いて、順子は「私ってからっぽなんだよ」(p.74) と言って泣き始める。三宅さんは「一緒に死のう」(p.76) と言い、順子も同意する。少し眠るので焚き火が消えたら起こしてくれるようにと頼む順子に、三宅さんは「焚き火が消えたら、寒くなっていやでも目が覚める」と答え、順子は「束の間の、しかし深い眠りに落ちた」(p.77)。

順子と三宅さんが共通して持っているのは、自分が「からっぽ」だという空虚感であり、

[17] たとえば、小村が釧路へ向かう飛行機の中で読む新聞記事では、地震による「悲惨な事実が次々に明らかになっていた」が、「小村の目には、それらのディテイルは妙に平板で、奥行きを持たないものに映った」(p.22) のである。

それは冷蔵庫の冷たさとも関連している。この自己の中の冷たい空虚さを熱で充たすために、二人は焚き火をするのである。三宅さんの絵の中のアイロンも焚き火と同じく、冷たい空虚さを埋める熱を発するものの「身代わり」として描かれたものであろう。順子にはジャック・ロンドンの『たき火』の主人公のように「圧倒的なるもの」を相手に闘う情熱はなく、三宅さんも夢の中で閉じ込められた冷蔵庫から出られないように、妻子のいる神戸を襲った地震災害に対して何のコミットメントを行うこともできない。しかし、最後の「焚き火が消えたら、寒くなっていやでも目が覚める」という言葉には、焚き火の熱で自己の冷たい空虚感を充たし終えて、目を覚ましてコミットメントへと向かっていこうとする希望のようなものも感じられるのである。

３．コミットメントの困難

デタッチメントの姿勢をとっていた人物が自己の空虚感を自覚してコミットメントへ向かおうとするとき、様々な困難が生じてくる。ここで問題となるのは、具体的に何にどのようにコミットメントするかということであり、場合によっては学生紛争やオウム事件のようなコミットメントの失敗へとつながっていくことにもなる。

3 作目の表題作『神の子どもたちはみな踊る』の主人公である善也には父親がいない。実際にはかつて母の恋人だった産婦人科の医者が父親だと思われるが、その医者は避妊を完璧に行っていたので、自分が父親であることを否定した。絶望した母は海に身を投げようとして救われて新興宗教に入信し、善也を生む。そして善也の父は彼女の宗教の神である「お方」だと、母は善也に言い聞かせて育てた。善也の子ども時代の導き役だった田端さんも、「君のお父さんである方は世界そのものなんだ」（p.87）と教えていた。しかし善也には「自分が＜神の子＞というような特別な存在だとは思えなかった」(p.88)のである。彼はまた、外野フライがうまく捕れるようになることを父である神に毎晩祈ったりもしたが、その願いが叶えられることもなかった。彼は中学に入ってまもなく信仰を捨てるが、その最大の理由は「父なるものの限りない冷ややかさ」であり、その「暗くて重い、沈黙する石の心」（p.98）だった。つまり、善也が求めていたのは冷たい抽象的な父親としての神ではなく、温かい血の通った具体的な父親だったのであろう。

そして震災後の救援のため母が大阪の教団施設へ出かけている 2 月のある日、善也は会社からの帰宅途中に自分の父親の産婦人科医と思われる男を発見して追跡するが見失い、野球場に辿り着く。すると「一連の行為の重要性が、彼の中で突然不明瞭になった」(p.105)。そこで彼はマウンドの上で踊り始めるが、大学時代から踊りが好きで、踊っていると「自分の身体の中にある自然な律動が、世界の基本的な律動と連帯し呼応しているのだという確かな実感」（p.107）を感じた。[18] 踊り続けるうちに彼は「自分が踏みしめている大地の底に存在するもの」(pp.109-110) のことを考え、「そこには深い闇の不吉な底鳴りがあり、

[18] 「踊る」という行為は、たとえば長編小説『ダンス・ダンス・ダンス』でも重要な意味を持っており、羊男は「僕」に対して、もとの世界と繋がっているために「音楽の鳴っている間はとにかく踊り続けるんだ」と呼びかける。村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス（上)』(講談社 2004 年）182 ページ参照。

欲望を運ぶ人知れぬ暗流があり、ぬるぬるとした虫たちの蠢きがあり、都市を瓦礫の山に変えてしまう地震の巣がある」（p.110）と感じる。そして「それらもまた地球の律動を作り出しているものの一員なのだ」（p.110）と思うのである。踊り終わった善也は、三年前に尿道癌で亡くなった田端さんの言葉を思い出す。死の前日に田端さんは、「僕らの心は石ではない」のであり、「僕らはそのかたちなきものを、善きものであれ、悪しきものであれ、どこまでも伝えあうことができるのです」（p.112）と語っていた。そして善也はマウンドにかがみこんだまま、「神さま」と口に出して言うのだった。

少年期の善也は、「冷ややか」で「暗くて重い、沈黙する石の心」を持つような抽象的な父としての神にコミットメントすることができずに信仰を捨てた。一方、そのような抽象的な神や思想に直接コミットメントしようとしたのが、学生運動やオウム事件の失敗であったといえる。善也はそれ以来ずっと求めていた実の父親と思われる人物を追跡して見失うが、思想や信仰ではなく「踊る」という身体的行為によって万物の律動の連帯と呼応を具体的に実感し、「石ではない」人の心を「どこまでも伝え合うことができる」と思うことによって、「世界そのもの」としての神にコミットメントすることができたのである。ここに、神や思想といった抽象的なものへのコミットメントの困難とその克服の可能性への道筋が示されているように思われる。

４作目の『タイランド』では、人の心の中の石がコミットメントの障害となる。主人公のさつきは甲状腺の専門医で、学会のためタイへやってきて、その後も休暇でしばらく滞在する。彼女は三年前にアメリカ人の夫と離婚しているが、その理由は「君が子どもを欲しがらなかったこと」（p.119）であった。実はさつきには結婚以前に妊娠中絶をしたらしい過去があり、相手の男は震災が起こった神戸に住んでいた。ガイド兼運転手のニミットから震災の話題が出たとき、さつきは「あの男が重くて固い何かの下敷きになって、ぺしゃんこにつぶれていればいいのに」と思い、「それこそが私が長いあいだ望んできたことなのだ」（p.126）と感じる。彼女は地震の直後にその男の自宅に電話をしていたが、電話は繋がらず、そのときも相手が不幸に見舞われていることを願っていた。「あなたが私の人生に対してしたことを思えば、私の生まれるはずだった子どもたちに対してしたことを思えば、それくらいの報いがあって当然ではないか」（p.129）と思ったのである。

さつきはタイ滞在の最終日に、ニミットから「心を治療する」（p.141）という不思議な老女のところへ案内される。老女はさつきの手をしばらく握ったあとで、さつきの身体の中に白くて堅い石が入っていて、「長年にわたってそれを抱えて生きてきた」のであり、それをどこかへ捨てなければならないと言う。[19] 老女はさらに、さつきが「緑色の蛇」の夢を見るであろうから、その蛇を「あなたの命」（p.140）だと思って目が覚めるまで全力でつかんでいれば、石を飲み込んでくれるだろうと予言する。そして老女は最後に、「そのひとは死んでいません」と告げ、「それはあなたの望んだことではなかったかもしれませんが、

[19] 思念の結晶としての石のモティーフは、短編小説『日々移動する腎臓のかたちをした石』でも用いられている。

あなたにとってはまことに幸運なことでした」と言う。

その夜、さつきはベッドで泣いて、身体の中に白い石が入っていることや緑色の蛇がどこかに潜んでいることを認識し、生まれなかった子どものことを思い、一人の男を三十年にわたって憎み続け、男が死ぬことを求め、「そのためには心の底では地震さえも望んだ」ので、「ある意味では、あの地震を引き起こしたのは私だったのだ」（p.143）と感じる。そして、「あの男が私の心を石に変え、私の身体を石に変えたのだ」と思うのである。

物語はさつきが帰りの飛行機の中で、とにかくただ眠り、「夢がやってくるのを待つのだ」（p.147）と決意して終わる。彼女の身体の中にあるという白い石は、神戸の男への憎悪が凝り固まったものを象徴しており、その意味では心の中の石と考えられるだろう。さつきは自分の思念が自然とも繋がっていて、自分の憎悪が地震を起こしたとまで考える。しかし、『神の子どもたちはみな踊る』の善也が踊ることで万物の律動の連帯と呼応を実感し、「石ではない」人の心を「どこまでも伝え合うことができる」と思えたのに対し、さつきのコミットメントは自己の心の中の石にのみ向けられ、心を他者へと伝え合うことができない。彼女が他者へのコミットメントの道を開くためには、自身の心の中の固着した思念としての石を解消し、「石ではない」人の心を取り戻すことが必要だったのである。

４．コミットメントの可能性

5 作目の『かえるくん、東京を救う』は、平凡な会社員である片桐が自分のアパートに戻ると「かえるくん」という巨大な蛙が待っていて、彼を大地震から東京を救うための闘いにコミットメントさせるという物語である。そこには地震のような「圧倒的なるもの」に対する平凡な個人のコミットメントの一つの可能な形が示されている。

かえるくんは片桐に、神戸の大地震よりさらに大きな地震が三日後に東京を襲うことになっていると告げる。そして、その震源地は片桐が勤める東京安全信用金庫新宿支店の真下であり、地震を阻止するために片桐と一緒にその地下へ降りて行って、「みみずくん」を相手に闘うのだと言う。みみずくんというのは地底に住む巨大なみみずで、腹を立てると地震を起こすが、「遠くからやってくる響きやふるえ」を感じ取って蓄積し、それらを「憎しみというかたち」（p.161）に置き換えるのである。[20]

かえるくんが片桐に求めるのは、直接みみずくんと闘うことではなく、「まっすぐな勇気を分け与えてくれること」、そして「友だちとして、ぼくを心から支えてくれること」（p.165）であり、いわば心のコミットメントである。片桐は承諾するが、行動を起こす前に突然狙撃され、病院のベッドで目を覚ますと、実際には狙撃されたのではなく、路上で昏睡していたのを発見されて病院に運ばれたのだった。すると、その日の夜にかえるくんが病室に現れて、「片桐さんは夢の中でしっかりとぼくを助けてくれました」（p.179）と言う。そして、地震は阻止することができたが、みみずくんとの闘いは引き分けに持ち

[20] 地下に住む不気味な存在としての「みみずくん」は、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』に出てくる「やみくろ」や『１Ｑ８４』のリトル・ピープルなどと同じ系列のものと考えられる。

込むことができただけだと告げて、身体を分解させて消えていく。

ここで、人間に甚大な被害をもたらす地震は、『タイランド』と同じく「憎しみ」が集積することによって生じるものとされているが、これは宗教や政治的イデオロギーの対立といったシステム的なものから生じる戦争などのアナロジーをなしているように思われる。地震や戦争のようなシステム的で「圧倒的なるもの」に対して、平凡な個人が直接的にコミットメントすることは危険かつ困難であり、それは学生運動やオウム事件のようなネガティブな結果をもたらすことにもなる。ここで示される可能性は、「友だちとして、ぼくを心から支えてくれること」というような、具体的な他者への心のコミットメントであろう。かえるくんが平凡な会社員の片桐を協力者に選んだ理由も、片桐が仕事で評価されなくても地味で危険な仕事を引き受け、家庭で感謝されなくても自己を犠牲にして弟や妹の面倒を見ていたからであり、身近な他者への心のコミットメントを行う人物だったからである。

地震のような「圧倒的なるもの」に対する身近な他者へのコミットメントの可能性は、書き下ろしとして短編集の最後に収録された『蜂蜜パイ』でも提示されている。この小説では、主人公である小説家の淳平が語る熊のまさきちととんきちの物語が一種のミザナビームとして挿入され、それと平行して淳平と親友の高槻、その元妻の小夜子と娘の沙羅たちの物語が進行する構造をなしている。[21]

淳平と高槻と小夜子は大学時代に知り合って「小さく親密なグループ」を形成し、「いつも三人で行動」（p.199）するほどの親友同士であった。淳平は小夜子に対して「彼女こそ自分が探し求めていた女性だと確信した」（p.200）が、三人の間に「バランスよく成立している今の関係」（p.201）が損なわれることを怖れて、想いを打ち明けることができなかった。ところが高槻も小夜子のことが好きで、高槻から了解を求められた淳平は承諾してしまう。高槻と小夜子はやがて結婚し、娘の沙羅が生まれる。しかし、小夜子は淳平に対して特別な感情を持っており、高槻もそのことを感じ取り、彼は淳平に対して「今だから言うけど、小夜子はもともとは、俺よりはお前に惹かれていたんだと思うな」（p.214）と言い、「お前には大事なことは何もわかっていない」（p.215）と非難する。そうして高槻はよそに女をつくって小夜子と離婚し、淳平に小夜子と結婚することを勧めるが、淳平には決心がつかない。「淳平と小夜子との関係は、そもそもの最初から一貫して、他の誰かの手によって決定されていた」のであり、「彼は常に受動の立場に立たされていた」（p.222）のである。ここまでの彼の行動はデタッチメントに基づいているといえるだろう。そして、そこへ地震が起こり、コミットメントへと向かいはじめる。

地震のニュースを見てから、小夜子の娘の沙羅はヒステリーのような症状を起こして夜中に目を覚まし、「地震男」がやってきて沙羅を小さな箱の中に入れようとすると言って怖がるようになっていた。小夜子から相談を受けた淳平は、沙羅に熊のまさきちととんきちの物語を話して聞かせるようになる。この物語を通じて、自分と高槻との関係について考

[21] この小説のミザナビーム構造については、拙稿「「村上春樹の短編小説におけるミザナビーム手法」（『言語文化共同研究プロジェクト 2014「文化」の解読（１５）－文化と翻訳』（大阪大学大学院言語文化研究科）2015 年）26－28 ページ参照。

え直した淳平は、初めて小夜子とセックスをする。するとそこへ沙羅が起きてきて、地震男が来て「みんなのために箱のふたを開けて待っている」（p.233）と告げたと話す。沙羅が小夜子と一緒に寝た後で、淳平は一人になり、「夜が明けて小夜子が目を覚ましたら、すぐに結婚を申し込もう」（p.236）と考え、そうして「相手が誰であろうと」、「たとえ空が落ちてきても、大地が音を立てて裂けても」（p.237）、小夜子と沙羅を護らなくてはならないと決意する。

ここで沙羅の前に現れた「地震男」は、人間に不意に襲いかかってくる地震のような「圧倒的なるもの」の象徴であろう。そのようなものに対して、淳平は小夜子や沙羅といった身近な具体的な他者を護るというコミットメントを行うのであり、これは村上春樹自身がエルサレム賞受賞講演で述べた「もしここに硬い大きな壁があり、そこにぶつかって割れる卵があったとしたら、私は常に卵の側に立ちます」[22] という有名な言葉にも対応している。壁にぶつかったら割れるような一つ一つの卵の側に立つことこそが、阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件という二つの「日常的な想像力を超えた出来事」によって惹起された日本人たちが取り得るコミットメントの可能性としてここに示されているように思われる。

５．終わりに

1960 年代の学生運動もオウムによる地下鉄サリン事件も、自分たちの前に立ちはだかる壁としてのシステムに対抗してコミットメントを行ったが、逆に自分たち自身がシステムと化してしまい、個人を抑圧する結果となった。地震や戦争のような「圧倒的なるもの」の巨大な壁に対して一人一人の個人は卵のように無力だが、村上春樹は連作短編集『神の子どもたちはみな踊る』において、壁としてのシステムではなく卵としての一人一人の個人に対してコミットメントを行うことを、震災後の日本人たちに一つのコミットメントの可能性として示したのである。

しかし今日の社会においては、のちの小説『１Ｑ８４』に描かれるように、個人を抑圧するシステムはビッグ・ブラザーのような巨大な壁として立ちはだかるのではなく、リトル・ピープルのように一人一人の個人の内部に侵入して破壊的な力として至るところで現れ出るという形をも取りうる。[23] 『かえるくん、東京を救う』で、みみずくんが「遠くからやってくる響きやふるえ」を感じ取って蓄積し、それらを「憎しみというかたち」に変えることで地震を引き起こすように、一つ一つの卵としての個人の憎しみが集積すると戦争や紛争が起こりうる。卵が集まってシステムに取り込まれ壁を形成してしまうという危険性も常に存在するのであり、その意味ではコミットメントの困難さは容易に解決されうる問題ではないともいえるだろう。

---

[22] 村上春樹『村上春樹 雑文集』（前掲書）97 ページ。

[23] このような考え方はとくに、宇野常寛『リトル・ピープルの時代』（幻冬舎 2015 年）序章および第 1 章で展開されている。宇野は壁と卵が対立関係だけでなく「共犯関係」にもあることを指摘し、「システムに支配されないために必要なのは、壁＝システムは私たちの外側ではなく内側にあることを自覚することではないか」（p.16）と述べている。